論文・優秀賞

SNSで幸せに生きるために私たちができることのすべて

大学3年
保理江　悠人

SNSで幸せに生きるために私たちができることのすべて

大学3年
保理江　悠人

凡例

- 2024年現在、TwitterはXに改称され、様々な用語も変更を余儀なくされている。本論では既存の用語の体系性を尊重し、一貫して旧来の用語を用いた。

本文

一　つながりの社会

世界を幸せにするまえに、まず私たちが幸せにならなければならない。

私たちは現実社会とともに、SNSにおいてつながりの社会を生きている。私たちはスマートフォンを持ち、SNSを利用することで、〝いつでも・だれとでも〟つながっている。いま私は内閣総理大臣のツイッターアカウントにメッセージを送ることができるし、私のアカウントに見知らぬ人からコンタクトがある可能性は常に潜在されている。こうした接続可能性に満ちた世界を私たちは現実世界とともに生きている。

総務省情報通信政策研究所「令和4年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」から世代別の主なソーシャルメディア系サービス・アプリ利用率をみると、まず全世代を通してライン・ユーチューブが絶大な支持を獲得している。そして、10代ではツイッター（54.3％）よりもティックトック（66.4％）やインスタグラム（70.0％）のほうが多くの利用者を獲得しているが、20代ではツイッター（78.8％）の利用率が最も高く、インスタグラム（73.3％）、ティックトック（47.9％）と続いている。

天野彬『SNS変遷史』はSNSをその利用法に応じて四つに分類しており、それは次のように整理できる。

- 発信する人が重要で、不特定多数に発信する　＝　ツイッター・フェイスブック
- 発信する人が重要で、特定個人に発信する　＝　ライン・スナップチャット
- 発信されるコンテンツが重要で、不特定多数に発信する　＝　ユーチューブ・ティックトック
- 発信されるコンテンツが重要で、特定個人に発信する　＝　インスタグラム・IGTV

20代から10代の変化として顕著なのは、ツイッターという発信者志向のSNSからティックトック・インスタグラムといったコンテンツ志向のSNSへと関心が移っていることである。ツイッターでは主に文章が投稿され、インスタグラムでは画像が、ティックトックでは動画が投稿される。文字情報から視覚情報へと中心が移っている点にも注目したい。LINEにおいても会話はスタンプのやりとりが多くなっており、そこではコミュニケーションの内実よりもコミュニケーションしているという実

感だけが求められている。

コンテンツ重視、視覚重視の傾向を端的に示すのが〈映え〉という言葉だろう。私の考えでは、〈映え〉を通して行われているのは個を類に位置づける営みである。〈映え〉の語義は流行していて・オシャレである点にあるだろう。天野が指摘するように、近年では「想い出を写真に撮る」から「写真映えする想い出をつくる（それをSNSで人に見せたい）」へと行動の順序が逆転している。彼らは個の思い出ではなく類の嗜好を重視しているのだ。これはいささか実感を込めていうのだが、SNSに慣れ親しんだ人々は、個の出来事がいかに集団（つながりの社会）に関心を持たれないかを深く理解している。私たちはその対応として、ツイッターという広大なつながりのコミュニティからインスタグラムというやや閉鎖的なコミュニティに移り、ハッシュタグを用いて類型の束のなかに自身を紛れ込ませ、映えの内部に自身を位置づけており、そこで相互に〈いいね〉を送りあって何度もつながりを確かめ合っているのだ。ティックトックにおいてもそこにあふれるのは起源の分からない演出パターンのコピーである。彼らはその繰り返しにつながりを感じているのだろう。

このように、私たちはSNSでつながりを確認しあっている。常につながっているのに、なぜつながりを確認するのだろうか。

二　空間のつながりから関心のつながりへ

まず、つながりの内実を詳しく見ることが必要だ。私たちはSNSで誰とでもつながっているが、ここでのつながりとは程度の最も低いものである。いわば同じ広場に集まっているというだけで実質的なコミュニケーションは生まれていない。次に、SNSにおいて自身の投稿はアカウントと紐づけられているが、他人のアカウントをフォローすることで相手の投稿を継続的に閲覧できるようになる。ここではやや強いつながりが生まれているが、あくまで一方的なつながりに過ぎない。さらに、相手の投稿にいいね・リツイート・返信などのリアクションをとることで、相手からのフィードバックを得られることがある。ここで相手が自分のアカウントをフォローすれば、そこに相互的なつながりが生まれたことになるだろう。しかし、この相互フォローにおいても、私たちはいつでも相手のアカウントをブロックし、お互いにメッセージが表示されず、リアクションすらとれない状況に置くことができる。この双方向的なつながりは常に〈降りる〉ことができるものにほかならない。

相対的にみれば、SNSのつながりは浅く現実のつながりは深い。しかし、根本的な違いはつながりの基底にある。現実のつながりは空間によって強く規定されている。言うまでもなく、現実で私たちはそばにいる人としか会話することができない。幼馴染やクラスメイトは近くにいたために関わらざるをえなかった相手である。一方で、SNSでのつながりは全く自由であり、私たちは関心の近い者とのみつながることができる。興味があればフォローし、興味がなくなればフォローを解除して、ときにブロックして関係を断つ。

現代の若者において現実の〈空間のつながり〉は〈関心のつながり〉に変化しはじめている。その根本的な原因は、土井隆義が『「宿命」を生きる若者たち』で指摘するように「一九七〇年代以降の急激な経済成長と人口の拡大」が「境界を超える人口移動」をもたらしたことで人間関係が自由化されたためだろう。そして、近年のSNSの拡大が関心のつながりの進行に拍車をかけているのだ。

また、土井隆義は『キャラ化する／される子どもたち』において、学校文化のあり方が画一化から多様性の尊重へと変化し、教師に反抗することによって連帯していた学生たちがクラスの横のつながりの中で具体的な承認を求めるようになったことを指摘する。土井は「内在化された「抽象的な他者」という普遍的な物差しが作用しなくなっているために、その代替として、身近にいる「具体的な他者」

からの評価に依存するようになっている」と述べる。「内在化された「抽象的な他者」」とは制度や権力のこと、「身近にいる「具体的な他者」」とはクラスメイトのことだ。横のつながりを意識する彼らは、「予定調和」を破ったり「相補関係」を傷つけるような対立を回避し、「摩擦のないフラットな関係」を求める。土井はこの関係を「優しい関係」と呼ぶ。

土井は「優しい関係」の難しさを述べているが、同時にクラス内がいくつもの「優しい関係」のグループに分裂していることを指摘している。その困難な「優しい関係」が最も安定して成立するのは〈関心のつながり〉においてだろう。同じ部活に所属している・同じゲームをプレイしている・趣味が一致している。空間を共有する教室においても、彼らは関心のつながりによって細かなグループを形成しているのだ。

三　宿命をつなげる

さて、このようにつながりが自由化されると血縁までが自由な関係として捉えられるようになり、自らの出生すら可変的なものとしてみなされる。たとえば若者向けの文芸ジャンルであるライトノベルでは〈異世界転生譚〉が流行しており、そこで主人公は異なる環境に〝転生〟することで、より理想的な生を〝生き直す〟ことができる。また、現代の若者は自らの容貌や能力が親によってア・プリオリに決まっていることを〈親ガチャ〉という言葉で表現する。共通するのは現在の生にたいするネガティブな評価であり、前者のあとに後者が成立したことは若者の価値観が来世的な期待から前世的な諦念に変化したことを示している。

〝いかようにも生きられた〟はずなのに、〝このように生まれてしまった〟ために、〝このように生きるほかない〟。このような生の宿命観が現代の若者に蔓延している。すでに引用したが、土井は『「宿命」を生きる若者たち』において現代の若者が「一方では経済格差や学習格差が拡大し、社会的排除も進みつつあるというのに、他方では生活満足度や幸福感が上昇し」ていることを疑問視し、その理由に「先天的な属性によって、自分の運命がほぼ決まっている」という「宿命論的人生観」を挙げる。成長を終えて「高原期」に入った日本社会の若者は「未来に期待していない」。そして、成長神話が崩れたことで「人生の羅針盤」の不在に直面した若者は、「指針の代わりを周囲の人びと」のリアクションに求めている。私たちはこのように生まれてしまい、いまどうすればいいか分からない。だからつながりたいのだ。

しかし、関心のつながりを進めていくと私たちは二つの困難に直面することになる。まず、私たちは「腹を割ってお互いに議論を尽くす」ことができない。なぜなら、意見の対立は関心の対立であり、それがそのままつながりの断絶に直結してしまうからだ。次に、私たちは異なる価値観の人々に対して「無関心」になる。たしかに私たちは価値観の多様性を認めているが、それは彼らを見ないことによってである。彼らの存在は認めつつ、彼らとの対話は望まない。

私がマイノリティであるとき、私は大きな関心のつながりを形成することができるが、そこでは本音を話すことができない。私がマジョリティであるとき、私は本音を話すことができる小さな関心のつながりを形成しえたとして、マジョリティにあ自分の存在は対話しないかぎりにおいてしか認められていない。

宿命を背負った私がそのままの形で他者とつながること。このようなつながりを〈深いつながり〉と呼ぶことにしよう。それは空間のつながりに導かれた幼馴染みのように、常に本音で話せるような関係である。対立することがあっても、わだかまりを抱えながら内省し、なおつながり続けることで自然と和解に導かれるような関係である。私たちはそこで一人の複雑な人間としてお互いを分かりあうことができる。このような深いつながりによる本音の対話を、宿命の肯定を、若者が求めていると

したらどうだろうか。

〈承認欲求〉という言葉がある。多くの人に認められたい。いいねが欲しい。こうした若者の承認欲求の高さはくりかえし指摘されてきた。しかし、その根本的な原因はSNSという関心のつながりの場において深いつながりを築こうとするところにあるのだ。そもそも承認とは他者とのつながりを実感することである。勿論たくさんのいいねが来たところで深いつながりは導かれない。しかし、彼らは多くの人々に承認されることで深いつながりの欲求を疑似的に解消してしまうのだ。そして、実際には深いつながりが満たされないために承認欲求は膨らみつづける。

これが私の〈常につながっているのに、なぜつながりを確認するのだろうか〉への答えである。一方、岩内章太郎『〈私〉を取り戻す哲学』は深いつながりの欠如を「〈私〉の不在」として説明している。

> 起床から始まり、トイレ、三度の食事、通勤、待ち時間、そして就寝の直前まで（中略）私たちはスマホやタブレットを手放さない。仕事でパソコンを使用している人なら、一日のほとんどの時間、スクリーンに映る情報に晒されているだろう。
>
> こういうことが当たり前になった日常の中で、私たちはふとした瞬間に異様な疲労感をを覚える。誰とでもつながっているからこそ、形容しがたい孤独を感じる。（中略）
>
> その理由を端的にいえば、細かい情報の塵が山ほど頭に積もり、何かをゆっくりと立ち止まって考えるための空き容量が不足しているからである。みんなに置いていかれたくない、という漠然とした同調意識に支配されて、自分が何を欲しているのか深く考えなくなっているからである。そして、〈私〉の不在。これが最も深刻である。情報に意味を与える〈私〉がいない。

そして、岩内はSNSでは〈私〉を演出し取り繕う「自己デザイン志向」が強く働くとする。〈私〉をいかようにもデザインできることが「〈私〉の存在をよくわからないものに」してしまう。なぜなら、「デザインできない」「「弱さ」や「脆さ」」こそが〈私〉らしさを実感させるからだ。いかようにも生きられるにもかかわらず、このように生きてしまった〈私〉の弱さ。これは宿命である。岩内はSNSにおいても、宿命を基底に置くことで〈私〉を取り戻すことができると考えるのだ。

岩内の論の主眼は、私たちみながヒトという宿命――「絶対性」と「有限性」――を背負っていることを理解することで、「すべての〈私〉への尊重」が生まれるとするものだった。しかし、この考えには具体的な他者との交流の方法が欠けている。たしかに宿命を自覚して〈私〉の弱点をさらけ出せば〈私〉は〈私〉でいられるのかもしれない。みな同じ宿命の下にあると考えれば他者への尊重が生まれるだろう。しかし、この弱々しい〈私〉はどうすれば他者とつながることができるのだろうか。SNSという他者の視線が無限に反復する空間において、個の出来事が語りづらく、類の嗜好に合わせてしまうことはすでに指摘している。

SNSで〈私〉を深くつなげるためにできること。ここで私はツイッターという場に注目したい。

四　ツイッターの希望と困難

写真と映像は私たちを客体化する。写真や映像にあらわれるのは私がなにを考えてどのように生きてきたかではなく、いまこのような外見で生きているという極めて瞬間的で客観的な情報である。もちろん配慮の行き届いた写真・映像は被写体の心をも写し取ってしまうだろうが、私たちは素人であるし、写真・映像は〈映え〉の舞台となっている。

視覚情報では本音を語りにくい。これから引用する大谷能生『〈ツイッター〉にとって美とはなにか』の表現に従うなら、視覚像は〈場面〉を持たないというべきかもしれない。〈映え〉の類型に私たちを埋め込んでいくだけでは私たちはいつまでも深くつながることができない。私たちは自分の本音を、宿命を語るために、そしてそれを人とつなげるために、どうしても言葉を用いなければならないのである。

しかし、ツイッターにはいくつかの困難がある。大谷はツイッターの特徴について、大きく分けて次の二点を挙げている。一点目は「エコーチェンバー」「サイバーカスケード」「フィルターバブル」による価値観の偏りである。総務省『令和元年版　情報通信白書』の第1部・第4節「デジタル経済の中でのコミュニケーションとメディア」によると、エコーチェンバーとはSNSにおいて「自分と似た興味関心を持つユーザーをフォローする結果、意見をSNSで発信すると自分と似た意見が返ってくる」こと。サイバーカスケードとはインターネットにおいて「同じ思考や主義を持つ者同士」がつながりやすく、集団の志向が「特定方向に先鋭化する」現象のこと。フィルターバブルとは、インターネットやSNSのアルゴリズムが利用者の使用履歴を学習することで、ユーザーの「見たい情報が優先的に表示され、利用者の観点に会わない情報からは隔離され」る状況を指す。自分の価値観がバブルの中で孤立するということだ。

これらは大谷が「常識的な案件」と断るものだが、津田正太郎『ネットはなぜいつも揉めているのか』では行き届いた批判がなされている。ネットは「情報へのアクセスコスト」が低いため多様な情報に触れやすいこと。むしろ空間のつながりのほうが先鋭化しやすいこと。ただ、多様な情報に触れることで「かえって党派性が強まる」とも述べられており、エコーチェンバーなどの用語がもたらすとされる結果はなお有効である。ツイッターを見るとすぐに分かることだが、ここでは様々な出来事に対し、非常に攻撃的な放言・暴言が飛び交っている。率直に言ってそれらを見るのはかなり苦しい。

二つ目の点である。

> SNSに投稿することによって、ぼくたちは「話すこと」によって生み出される親密な言語活動と、「書くこと」に備わっている祭式性、疎外性、歴史性とのあいだで引き裂かれることになる。この引き裂かれにはぼくたちを、いまだ声と文字とが不分明だった時代、つまり、ぼくたちが字を書き習い覚えたその最初期の段階へと立ち返らせる力が備わっているのではないかとぼくは思う。ぼくたちは、おそらく、「文字」を使って「会話」をおこなうことによって、幼児期に経験した「文字を覚えるまでの過程」への退行を経験しているのである。

大谷はSNSが「話すこと」と「書くこと」が重ね合わさった場だという。詳しく紐解いていこう。まず、大谷は時枝誠記『国語学原論』を引用し、言語活動には〈主体〉〈場面〉〈素材〉の三つが必要だとする。〈主体〉は話者、〈素材〉は伝達される事象のことで、〈場面〉は空間や情景、主体の気分や態度までを含めた発話行為の状況全体を指す。また、時枝は「最も具体的な場面」は「聴手」だと述べる。会話では聴手も〈主体〉として〈場面〉に積極的に関与しているということだ。さらに、時枝は「もっとも源本的な場面」を「リズム」だとする。言語活動へと参入するために私たちは「リズム的場面」を共有しなければならない。「リズム的場面」とは一定のパターンを持った時間的経験の共有だ。

SNSでの「つぶやき」はあくまで書き言葉であり、聴手と共有するような「具体的な場面」を持たない。大谷によると、「つぶやき」とは「一人の〈主体〉が他の〈主体〉から切り離された〈場面〉において一人でおこなう」ものである。会話を展開する「複数の〈主体〉は存在せず」、書き手は「自分自身を「聴

き手」として、ひたすら自身のコトバの上にコトバを降り重ねること」で〈場面〉を生み出し続けなければならない。

たとえば大谷は「ちょwwwwwwwwwwwww」というSNSの書き込みについて、ここには「w」の「加速」から文末の「終止」という独特な「リズム」が生まれているとする。書き手はここで〈場面〉を構成する聴き手がいないために、せめて「リズム的場面」を導入することで「言語活動の安定化」を目指しているのである。

話し言葉という〈場面〉に親和的な発話から、〈場面〉を創出しなければならない書き言葉の「疎外」へ。先の引用部にある「「書くこと」に備わっている疎外性」とはこのような意味である。次に、「書くこと」の「祭式性」とは対象を持たない「音声」の繰り返しが「祖先や生霊や神」を呼び寄せて「祭式」を生み、「祭式」の継承として「文字」が生まれたとする吉本隆明の文字起源論に基づくものである。大谷によると、読み書きの習得は「「祭式」の継続・更新に参加することに他ならない」。最後に、「歴史性」とは書き言葉によって歴史が記録されてきたことを意味する。

大谷の論で重要なテーマは、私たちが根源的・家族的な「会話」の世界から抜け出して、制度的・社会的な「文字」を、小学校の膨大な学習によって習得し、しかもその過程を忘却していることにある。大谷は「会話」という「歴史」の外の「大衆」のコトバを、ツイッターの「歴史」に続く「文字」による「つぶやき」にみる。

> SNSにアクセスし、そこに表示されているものを眺め、書き込み、連絡し、そのような経験から得られる〈表現の厚みをくぐっているあいだ〉の〈遅延〉を感じ取り、「書く」ことと「話す」ことがかぎりなく近接しているこの表出から、具体的にまだ歴史の中に姿をあらわしていない存在を（中略）ぼくたちの世界の主体として把握すること。

このような「書き」慣れない人々がいかに〈私〉を「書く」か、そして深くつながるかという問いであるが、公教育が全般化した現代にあっては論の有効性を計りがたい。私たちはみな書くことに少なからず慣れているのである。その上で日常的に書きつづける人と書きつづけない人がいるだけなのだ。

天野は『SNS変遷史』で、ツイッターは「つぶやく」場ではなく「さえずる」場だと述べる。「みんなでぺちゃくちゃおしゃべりする」のがツイッターであり、その証拠にサッカーのような国民的イベントではハッシュタグを介してリアルタイムの感想が爆発的にツイートされることを挙げる。

すでに述べたように、単なる個のツイートは（ごく例外的な場合を除いて）関心のつながりを超えて集団の関心を引くことはない。おそらくこれが関心のつながりに閉じこもりたい若者が万人に開かれたツイッターから離れる原因なのだろう。それでもツイッターにとどまろうとするとき、私たちは個の「つぶやき」に終始するか、類の「さえずり」に参入するかの二者択一を迫られることになる。

「つぶやき」においても「さえずり」においても、私たちはSNSに存在する無限の他者に向けて言葉を放っている。「つぶやき」では他者に見向きされない〈私〉を痛感し、「さえずり」では他者に振り向かれるような〈私〉を演出する。ここにおいて、「書き」なれた私たちにおいても、いかにツイッターで〈私〉を書き、他者と深くつながるかという問いが導かれることになる。

五　ツイッターで〈私〉を深くつなげるためにできること

大谷はこのような問いに対して、おおむね二つの〝不十分な〟回答を示しているように思う。一つ目は書き言葉による詩である。

大谷によると、詩とは「「書く」ことによる疎外の経験を最大限に利用し、書かれたものによって展開される「自己表出」性を最大限に高めることによって構成される〈喩〉としての世界」である。ここでいう「自己表出」はさしあたり〈私〉の自己表現と捉えておく。詩は書き言葉を書き言葉として鋭く孤立させることで、そこに〈私〉を位置づける場を確保するということだ。しかし、大谷はこれを「目の前に存在している「映像」から目を逸らし、自分の内側でおこなわれている「言語活動」の〈場面〉にひきこもることによって初めて」成立すると述べる。ツイッターは言葉の場だと述べてきたが、そこには多くの画像・動画が投稿されている。「詩」はそれらに目をつむるとともに、個の「つぶやき」に自閉してしまい類の他者への回路が断ち切られている。

大谷が二つ目に挙げ、可能性を見ているのは「録音された声と音楽」である。書き言葉としての「詩」はもうそこにないものを凝縮された表現によって「再生」するが、「録音された声と音楽」は「一回きりしか存在しない「声」を反復」し、「コトバとして書かれているときも、読み終わったあとも、ずっと変わらずに何度でもぼくたちに同じ経験を与えてくれる装置」である。

「音楽」が〈リズム的場面〉を生み出し、そこに一回性の「声」を刻み込む。「一回性の出来事それ自体に〈ありとあらゆる体験を語らせ〉る」こと。たしかにここには〈私〉が根付いている。

しかし、「音楽」はどれだけ私たちの「声」を記録できるのだろうか。そこに「声と文字とが不分明だった時代」の「声」は本当に記録されるのだろうか。〈私〉が作詞作曲するならいい。あるいは「祭式」に連続しうるような民謡・俗謡であればいい。しかし、私たちの多くは自分の曲を持っていないし作ることができない。

詩と音楽を調停することはできないだろうか。ことばの問題であるから「映像」は諦めよう。しかし、「映像」のような豊かな時間性を湛えた〈リズム的場面〉を持ち、〈私〉の声を刻み込むことができ、それをあらゆる人が利用できることによって他者と深くつながれるような、そんなものがないだろうか。

ある。短歌だ。

六　短歌の可能性 ――〈私性〉と笹井宏之

そもそも短歌とは『万葉集』の時代からつづく詩型であり、歴史的な器であるとともに祭式の場へと通じる声を湛えていた。短歌が持つ濃厚な「祭式性、疎外性、歴史性」と、音数律によって生まれる共同体的な〈リズム的場面〉。現代短歌は口語化されているため、その〈声〉はかぎりなく肉声に近づいている。

短歌の可能性をみるまえに、なぜ定型俳句・自由律俳句・川柳ではないのかを答えておく。これは詩型の歴史性・祭式性や相対的な短さによっても説明できるだろうが、より重要なのは俳句・川柳の拘束性である。

一般に定型俳句では季語の使用が求められる。季語は季節感や本意などの含みを持った言葉のことで、仁平勝『俳句の射程』の言葉を借りれば「隠語」である。仁平は季語が仲間内でしか通用しない言葉であるため、「俳句はけっして大衆文学ではない」と述べている。

短歌には定型という緩やかな共同体があるのみだが、俳句には定型の内部に季語の体系というもう一つの狭い囲いがあるということだ。文語の季語が多いことで俳句全体が文語寄りになり、比して現代短歌が口語寄りであることを踏まえると、どちらのほうが大衆に開かれているかは言うまでもないだろう。

次に自由律俳句だが、これは広く親しまれていると言っていい。たとえばせきしろ・又吉直樹らの

自由律俳句が好評を博している。しかし、自由律俳句は定型という型を失ってしまったことで共同性を大きく損なっている。また、SNSで自由律俳句を書いても〈つぶやき〉との差異を際立たせるこよが難しい。

最後に川柳だが、川柳は音数律が俳句と一致しているために、俳句との差異性として俳句には（少）ない滑稽さや穿ちを求められているように思う。しかしこれは季語ほど強い拘束ではないため、多くの人々に親しまれる可能性は充分にあると考えられる。とはいえ、定型を保持した最も自由な定型詩が短歌であることは変わらない。

さて、短歌の可能性とは何だろうか。重要なのは〈私性〉というタームである。岡井隆『現代短歌入門』から引用しよう。

> 短歌における〈私性〉というのは、作品の背後に一人の人の――そう、ただ一人だけの人の顔が見えるということです。そしてそれに尽きます。そういう一人の人物（それが即作者である場合もそうでない場合もあることは、前に注記しましたが）を予想することなくしては、この定型短詩は、表現として自立できないのです。

岡井がのちに指摘しているように、本来〈私性〉の問題は「短歌は抒情詩であり、作者自身の感情表白を内容とするものである」という命題の可否として語られることが多かった。つまり、〈この短歌はあなたの本心ですか？〉という問いが発生するということだ。それに対して、岡井は〈短歌というものは、その歌群の背後に「一人の人物」が浮かんでくる詩型であって、それ以上ではない〉と答えているのである。

ここで、具体例として笹井宏之『えーえんとくちから』を挙げ、〈私性〉の本性とともに現代短歌の可能性を見てみたい。本書は笹井の短歌選集であるが、文庫版歌集として多くの人々に親しまれているものである。また、笹井宏之の短歌は非常に高い評価を得ており、2018年には書肆侃侃房から笹井宏之賞が創設され、彼の短歌の一節を冠した短歌ムック『ねむらない樹』が創刊された。名実ともに現代短歌の源流と言っていい。選歌集の冒頭五首を引用する。

> えーえんとくちからえーえんとくちから永遠解く力を下さい
> 二十日まえ茜野原を吹いていた風の兄さん　風の母さん
> この森で軍手を売って暮したいまちがえて図書館を建てたい
> 真水から引き上げる手がしっかりと私を摑みまた離すのだ
> 水田を歩むクリアファイルから散った真冬の譜面を追って

一首目は（おそらく）作中主体たる「私」が発話体で思いを語っている。二首目は語り手の三人称視点での語りである。三首目は一首目と同様だが、一首目にはなかった景が示されている。四首目は「私」の具体性を持った体験が喩に近いかたちで語られている。五首目では「私」が実際に行動を起こしている。総じて、五首全体には非現実的な空想が繰り広げられている。

作中で知覚し、思考し、行動する〈私〉と、そのような語りを展開する〈語り手〉が、歌群を読む読者のなかで止揚され、一つの像を結んでいく。短歌における〈私性〉はそのようなものとして存在する。「永遠解く力を下さい」「まちがえて図書館を建てたい」と願い、「風の兄さん　風の母さん（がいました）」と語る〈私〉がいる。「また離すのだ」「水田を歩む」において〈私〉と結びつけられるのは、非現実的に水中に沈み水田を歩く「私」ではなく、〝そのように語る現実的な〈私〉〟である。このよう

な手続きが読者の読みの意識下で行われている。

こうした〈私性〉の成立過程に行われる現実化は、読者が〈私〉を〈作者〉に近づけようとするところから生れている。おそらく近代の写実主義短歌ではこのような手続きが不要であった。〈語り手〉と〈私〉が〈作者〉に由来する現実性の内部で重複することで、近代短歌はいまも力強い存在感を示し続けている。

歌群から現実的な〈私〉が抽出され、ひとつの〈私〉に統一されること。その志向は単純に、歌集に一人の作者名が付されていることで私たちが歌群の後ろに〈作者〉的な〈私〉を探してしまうことに由来するのだろう。

穂村弘は『えーえんとくちから』の「解説」において、笹井の短歌の特色に「一首の中で存在が移り変わっている」ことを挙げ、そこに「魂の等価性」をみる。そして、その根拠に「作者の個人的な身体状況」を読み取ろうとする。

> 療養生活をはじめて十年になります。
>
> 病名は、重度の身体表現性障害。自分以外のすべてのものが、ぼくの意識とは関係なく、毒であるような状態です。テレビ、本、音楽、街の風景、誰かとの談話、木々のそよぎ。
>
> どんなに心地よさやたのしさを感じていても、それらは耐えがたい身体症状となって、ぼくを寝たきりにしてしまいます。

笹井の第一歌集『ひとさらい』のあとがきから引用したものだが、穂村はこれを踏まえ現代社会の抱える問題を「交換不可能なただ一人の〈私〉こそが大切」という価値観が「どこまでも増幅された結果とは云えないか」と指摘し、笹井の短歌が「未来の希望につながる鍵の形をしている」と述べる。

こうして歌集の後ろに作者性を見てしまうことが〈私性〉であった。私たちはこれまでの議論を踏まえ、笹井の短歌に穂村とは違う希望を見ることができるだろう。彼の短歌には幻想や空想が満ちあふれている。しかし、ゆたかな幻想や空想に満ちあふれているほど、のびやかな願望を語り様々な存在になりかわるほど、〈私〉を現実化しようとする読者はその行いの不可能性を感受する。〝何でもできるようにみえて、何でもできるという想像を働かせている身動きのとれない〈私〉〟を感じ取ってしまうのである。このような〈私〉が抱えているものを端的に宿命と呼んでしまっていいだろう。〝いかようにも生きられた〟はずであり、表現のレベルでは〝なんでもできる〟にもかかわらず、〝このように生まれてしまった〟ために、〝このように生きるほかない〟。これが笹井宏之の宿命であり、私たちは彼の短歌を読むことで、そこに自身の有限性を投影し、笹井と私たちとの間に深いつながりを築くことができるようになるのではないだろうか。

これが読むことによる深いつながりであるとすれば、書くことによる深いつながりとはどのようなものだろうか。いまSNSで読まれている短歌を通して、そこで何が起こっているのかを考えることにしたい。

七　いま短歌をつくるということ

2024年現在、現代短歌は短歌ブームと呼ばれる活況を呈している。たとえば先述した笹井宏之賞の応募者は第1回から384名、408名、533名、589名、592名、658名と増えつづけている。商業出版でもツイッターのバズをきっかけとして出版された岡本真帆の第一歌集『水上バズ浅草行き』は8刷

2万部を超え、若者に最も支持されている木下龍也の『あなたのための短歌集』は12刷4万1千部を突破しており、ともに歌集として異例の売上である。

そして、ツイッターではいまも膨大の短歌が生産されている。2024年2月15日16時53分現在、「#tanka」で検索すると1時間以内に投稿された短歌は（自動的にツイートを行うbotを含めて）34件である。およそ2分に1首以上ツイッターでは短歌が投稿されつづけている。

また、インターネット上で短歌を詠み合う場として「うたの日」（*http://utanohi.everyday.jp/*）は非常に大きな役割を果たしている。「うたの日」はの子氏が2014年4月にサービスを開始したオンライン歌会サイトである。現在は毎日9つの「部屋」が開かれ、それぞれに詠題が指定されており、参加者は好きな「部屋」を選んで出詠・選評することができる。くわえて、参加者の多くは開票の結果をツイートし、ツイッター上で積極的な交流を行っている（2024年2月15日の投稿者は327人である）。

では、いまツイッターで読まれている短歌はどのようなものだろうか。ツイッターという場に限っていえば、木下龍也・岡本真帆よりも谷川電話・中村森の短歌が広く読まれていると思われる。彼らの短歌をツイートのインプレッション数（表示回数）とともに引用する。

・谷川電話
　ありがとう夢で一緒に泣いてくれて　もうさよならを言ってもいいよ（27万）
　魔法からなんで呪いに変わったの？あなたの甘え、あなたの笑顔（45万）
・中村森
　言語化が出来ない好きを許したい　君だけずっと無敵でいいよ（21万）
　来世では、もう出会わない気がしてる「さようなら」って言えてよかった（22万）

彼らの短歌を読んでどう思うだろうか。ここで、木下・岡本より上の世代である東直子・穂村弘の『しびれる短歌』から、現代短歌に対する二人の対話を引用したい。

穂村　確かにわざとらしいという見方もあるんだけれども、短歌っていうのは、それを言っちゃうとほとんど成立しないから。（中略）
東　そうですね。現実の出来事にロマンのフィルターをかけてもらってからというのはありますね。
穂村　そうなの。紗をかけないとやっぱり駄目。今日話してよく分かったんだけれども、昔と比べて今の方がどんどん身も蓋もなくなってるから、最近の歌のほうがリアルではあるんだけど、でも身も蓋もなさ過ぎて……。
東　陶酔できないよね。

ここで二人がとりあげたのは「生徒は無名であった鶏がからあげクンとして蘇る」（木下龍也）、「＃あと二時間後には世界消えるし走馬灯晒そうぜ」（岡野大嗣）などの短歌である。木下と岡野は同世代の歌人である。木下・岡野、そして谷川・中村の歌はたしかに「身も蓋もない」短歌のように見える。

もうひとつ、大野道夫が『つぶやく現代の短歌史　1985-2021』で述べる2000年代短歌の特徴を引用しよう。

現代短歌における作者―読者の関係も、家族や地域などの絆が弱まるなかでは希薄な

自己を口語でうたうことによって確認し、直喩などの分かりやすい修辞によって身近と考えられる読者にも確認してもらいたい、また読者の側もリフレインなどの分かりやすい修辞の短歌を読み、ウィット機智などを楽しみながら身近に感じられる作者と繋がっていきたいという要求が背後にあるのではないか

木下・岡野は2010年代の歌人だが、これまで述べてきたように大野が述べる「自己」の希薄化は現在まで進行しつづけている。「身も蓋もない」表現を用いてでも〈私〉を読者に届けたいという欲求は、木下・岡野、そして谷川・中村にとって一層切実なものとなっているだろう。しかし、いわば紙面の木下・岡野の短歌と、SNSに適応した谷川・中村の短歌では明らかに異なる点がある。

それは〈場面〉を構築する意識の有無である。木下・岡野の短歌は、ウィットに富んだ表現を用いながらも一首の中で具体的な〈場面〉を構築しようとしていた。一方、谷川・中村の歌にあるのは剥き出しの感情表現である。そこに具体的な〈場面〉と呼べるものは「君」しかない。そう、〈私〉は〈あなた〉に直接感情だけを届けようとしているのだ。

「「書く」ことと「話す」ことがかぎりなく近接している」ツイッター、いやツイッターの短歌は、聴き手と共有されるような具体的な〈場面〉を持っていない。現代短歌は読者と共有される〈リズム的場面〉を下支えに、歌のなかに具体的な〈場面〉を構築する必要がある。それは、近代短歌のように現実的な景ではいけないし、SNSにおいては木下・岡野の短歌のように剥き出しの虚構でも満足できなくなった。なぜなら、私たちは〝今すぐ・私が・あなたと・直接〟つながりたいからだ。ここに東浩紀が『動物化するポストモダン』において「動物的」と読んだ現代人の心性――即時的に・個人的に・効率的に欲望を満たしたい――の現在形が見えるだろう。SNSという空間において、私たちはもはや〈場面〉を構築するような〝遅延〟に耐えられない。作中に「君」という最も具体的な〈場面〉だけを導入することによって、私たちは動物的なつながりの欲求を満たそうとしているのだ。

……本当にこれでいいのだろうか。剥き出しの感情の先には何があるのだろうか。たしかにこれらの短歌には普遍的な感情が乗せられている。そこには私たちが抱えている宿命のいくらかがあるのだろう。しかし、そこに〈私〉はいるのだろうか。私たちが共有できるものが剥き出しの感情しかないとしても、その短歌は個の表現などではなく、単なる類のための表現になってしまっていないだろうか。

私たちは〈私〉だけが背負った宿命を表現するために、自ら短歌を作らなければならない。短歌は短く、リズムを持ち、相手に届きやすい詩型である。私たちはそこに、〈私〉が抱えた宿命を、〈私〉にしかない〈場面〉を、言葉に乗せて届ける必要がある。

短歌を作ることで表現と伝達の〝遅延〟に身を慣らすこと。ボトルメールのように〈私〉を何度もツイッターの海に投じること。歌作を繰り返すことで、作られた短歌の群が〈私〉の宿命を描き出してしまうこと。そして、宿命を背負った〈私〉の短歌群を読んだ読者との間に深いつながりが生まれること……。こうすることで、私たちはSNSを幸せに生きることができるのではないだろうか。

参考文献（URLはすべて2024年2月15日に参照した）

東浩紀『動物化するポストモダン　オタクから見た日本社会』（講談社、2001）
東浩紀『動物化するポストモダン2　ゲーム的リアリズムの誕生』（講談社、2007）
天野彬『SNS変遷史』（イースト・プレス、2019）
岩内章太郎『〈私〉を取り戻す哲学』（講談社、2023）
うたの日（*http://utanohi.everyday.jp/*）
うたの日、2024年2月15日（*http://utanohi.everyday.jp/index.php?no=3608s* ）
大谷能生『〈ツイッター〉にとって美とはなにか』（フィルムアート社、2023）
大野道夫『つぶやく現代の短歌史　1985-2021』（はる書房、2023）
岡井隆『現代短歌入門』（講談社、1997）
岡本真帆『水上バズ浅草行き』（ナナロク社、2022）
木下龍也『あなたのための短歌集』（ナナロク社、2021）
木下龍也、2023年12月21日のツイート（*https://twitter.com/kino112/status/1737802003856978240*）
最適日常「うたの日とは」（*https://saiteki.me/uthttps://saiteki.me/utapedia-utanohi/pedia-utanohi/*）
笹井宏之『えーえんとくちから』（筑摩書房、2019）
笹井宏之『ひとさらい』（書肆侃侃房、2011）
せきしろ・又吉直樹『蕎麦湯が来ない』（マガジンハウス、2020）
総務省情報通信政策研究所「令和4年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」*https://www.soumu.go.jp/iicp/research/results/media_usage-time.html*）
総務省「第4節　デジタル経済の中でのコミュニケーションとメディア」（「第1部　特集　進化するデジタル経済とその先にあるSociety 5.0」『令和元年版　経済白書』、*https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/html/nd114210.html*）
谷川電話、2024年1月11日のツイート（*https://x.com/tanikawadenwa/status/1745403068546712024?s=20*）
谷川電話、2023年11月21日のツイート（*https://x.com/tanikawadenwa/status/1726920360904544650?s=20*）
谷川嘉浩『スマホ時代の哲学』（ディスカヴァー・トゥエンティワン、2022）
津田正太郎『ネットはなぜいつも揉めているのか』（筑摩書房、2024）
土井隆義『「宿命」を生きる若者たち』（岩波書店、2019）
土井隆義『つながりを煽られる子どもたち』（岩波書店、2014）
土井隆義『キャラ化する／される子どもたち』（岩波書店、2009）
時枝誠記『国語学原論』（岩波書店、1941）
中村森、2024年2月12日のツイート（*https://x.com/_57577/status/1756937859129565546?s=20* 、削除済）
中村森、2024年2月13日のツイート（*https://x.com/_57577/status/1757321922873094495?s=20* 、削除済）
仁平勝『俳句の射程』（富士見書房、2006）
東直子・穂村弘『しびれる短歌』（筑摩書房、2019）
まほぴ、2023年8月9日のツイート（*https://x.com/mhpokmt/status/1689201242814464000?s=20*）
吉本隆明『定本　言語におって美とはなにか　Ⅰ・Ⅱ』（角川書店、2001）